

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】 近藤 大介

【所属】（助成決定時）一橋大学大学院言語社会研究科博士課程

【研究題目】 ロシア文学にける商業化問題—ロシア・ジャーナリズムの形成過程についての研究

【研究の目的】

ロシアでは 1820 年代になってようやく文学が職業として成立するが、この大きな要因となったのがジャーナリズムの誕生である。この時期に民間による新聞・雑誌が発行され始め、文学作品の発表の場が創られたのである。それ以前の文学は親しい貴族たちが寄り集まったサロンで発表される「貴族の文学」だったが、ジャーナリズムの誕生によって文学が閉じられた空間からより広い読者へと向けられたのである。

それに伴い、原稿執筆の対価として原稿料が支払われ、文学作品の執筆は作家が糊口を得る手段となった。これは文学が社会の一つの制度として成立したことを意味しているが、このことは貴族作家からの反発も少なからず招いた。本研究では、文学が商業化する過程で起こった、旧来の貴族文学作家と新進の職業作家との論争を経て、いかにロシア・ジャーナリズムが成立したかを社会制度という側面から調査することを目的としている。文学の商業化はロシア社会全体が近代化する過程と連動しており、本研究はロシア社会の近代化という問題も射程に収めている。

【研究の内容・方法】

本研究において具体的な分析対象となるのは主に次の二点である。

ロシアで最初の本格的な職業作家であり、ジャーナリストでもある、Ф. B.ブルガーリンの文学活動。

1830 年代に起こった、文学の商業化をめぐる一大論争の詳細とそれが持つ社会的・文化的意味。

19 世紀前半のロシア文学において、当時最も知名度が高く、また最も売れる作品や記事を書いていたにも関わらず、その後文学研究者からは無視されてきた特異な作家ブルガーリンの文学活動は、ロシアでも本格的な研究が始まったのはソヴィエト崩壊後のことであり、彼の広大な作家活動の全貌はまだ完全に研究されたとは言えない状況である。ブルガーリンの活動を調査するにあたっては、彼自身が編集し執筆していた雑誌『北方文書』と『文学新聞』、そして日刊新聞『北方の蜜蜂』を収集し、丹念に分析した。これらの資料は日本では手に入らないものも多く、モスクワのレーニン図書館、国立歴史図書館で調査を行った。またブルガーリン研究の第一人者であり社会学という視点から文学研究を行っている A. И.レイトブラト氏とコンタクトを取り、ブルガーリン研究や 19 世紀前半のロシア・ジャーナリズムに関して貴重なアドバイスを頂いた。

②に関しては、上述したブルガーリンの新聞・雑誌の他に、ブルガーリンの文学上の盟友であるセンコフスキーが発行した『読書文庫』、ポレヴォイが発行していた文学雑誌『モスクワ・テレグラフ』、商業的文学に激しく反発していたシェヴィリョフの活動の場であった総合雑誌『モスクワの観察者』、プーシキンやその友人たちが参加していた新聞・雑誌である『文学新聞』と『現代人』等、を調査した。1820～1830 年代にはこれらの新聞・雑誌上で様々な作家たちによって文学のあり方を問う論陣がはられていることを確認した。そしてそれぞれのメディアに掲載された論文から、読者に向けられた戦略を分析し、当時のジャーナリズムの発展過程を追跡した。

【結論・考察】

ブルガーリンのジャーナリズム活動において最も重要であり、かつ最も長期にわたって発行されていた日刊新聞『北方の蜜蜂』には彼の作家としての戦略性が明確に認められる。それは文学をより広い読者層へと開くことであり、作家の社会的な地位を確立することであった。そのことは必然的に貴族階層の作家から反発を招くことになったが、旧来の貴族文学のシステムを改変しロシア文学を近代化することがブルガーリンの作家活動の当初からの目的であった。従来は「拝金主義」と揶揄されることもあったが、ブルガーリンのジャーナリズム活動におけるこうした社会変革の側面を見逃すべきではない。

そして「貴族作家」の代表格であるプーシキンは、それまで文学に馴染みのなかった読者層に向けて作品を書く意図を持っていた点ではブルガーリンと共通するが、ブルガーリンが読者（とくに中間層）の好みに合わせた作品を書いたのに対し、プーシキンは読者を自らの文学性に合わせることを目的としていた。ロシア・ジャーナリズムの錯綜とした発展によって、ロシアの読者層は「芸術的文学」を好む少数の知識人層と「大衆文学」を好む大多数のその他の階層とに二極化することになり、この両者は接近・融和することなく敵対する関係を確立させることになった。